

第 17 回(2009. 6. 15 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「6 月は五月雨」

俳人松尾芭蕉は、「奥の細道」で「五月雨(さみだれ)を集めて速し最上川」と詠んだが、この「五月雨」は旧暦の時代だったから、現在の 6 月にあたる。早い話が梅雨のことである。だから、「五月晴れ」という言葉は、本来は梅雨の晴れ間をいうのである。そもそも、梅雨の季節は雨が多くて湿度が高いので、空気がじめじめしていて黴(カビ)が生えやすいことから「黴雨(ばいう)」といわれていたのだが、ちょうど梅の実が熟す頃に当たるから「梅雨」に転じたといわれている。

梅雨は、極東アジア独自の気候で、いわば「雨期」である。しかし、もっともこの影響を受けるのは日本列島である。地球の上空は地球の自転にともなって空気が流れている。それが風の起こる理由の一つで、この風は季節によってだいたい決まった流れをしているのだが、これが季節風と呼ばれているものである。インドなど東南アジアから流れてくるアジア・モンスーンと呼ばれる季節風は、湿った空気を運んでくるが、太平洋上で発生する夏の高気圧に邪魔をされて、日本に停滞して梅雨前線、つまり河川のようなものを作るから、その前線に沿ってしょっちゅう雨を降らせるのである。夏になれば、高気圧が勢力を強めて日本列島にやってくるから、梅雨前線が北上して、やがて北海道にかかる頃、モンスーンと呼ばれる風が弱くなって消滅する。そこで、北海道には梅雨がないといわれる理由である。

日本の年間降雨量の約 2 割程度が、この梅雨時に降るといわれている。7 月に入り梅雨の末期になると、短時間に局地的に降る集中豪雨に見舞われることが多く、日本では昭和 57 年(1982)に長崎県で観測された 1 時間に 187 mm の降雨量が最高記録である。ちなみに、アメリカで降った 42 分間に 305 mm という記録が世界最高とされている。1 時間に 20 mm 程度で急造成された斜面では土砂崩れが発生する。また 50 mm 程度になれば大きな災害が発生する恐れがあるから、この 187 mm というのがいかにものすごい量かがわかる。この集中豪雨によって土砂崩れ、河川の氾濫などで受けた被害は枚挙にいとまがない。

梅雨は、うっとうしい季節だが、農業にはなくてはならないものだし、細長い日本列島が一年中飲料水に困らないのも、この間に降った雨による恩恵なのである。また、この梅雨のおかげで日本の農業は塩害から守られている。つまり雨によって土中の塩分が洗い流されているから、塩害による農業の被害が少ないのである。太古の昔、地球が形成された頃、火山の噴火などによって大気中にまき散らされた「塩酸(HCl)」が、その後降った雨にとけ込んで、地中の「ナトリウム(Na)」と化学反応を起こして「塩(NaCl)」になったといわれている。だから、海に流れ込んで塩水になり、土中にも塩分が多く含まれているわけである。子どもの頃読んだ童話にあるような、塩が出る石臼を海中に投じたなどというのを信じた頃が懐かしいが、現代の子どもたちは、そんな話を信じない。「どうして？」などと聞かれて、童話を持ち出してバカにされ、子どもの信頼を失くさないためにも、これは知っておいた方がいい。

しかし、現在では自動車の排気ガスや、重油を燃やした煙などに含まれている窒素酸化物や硫黄酸化物が、空気中のチリとなって雨に含まれて降ってくるが、これが「酸性雨」である。近年は中国など東南アジアの経済成長に伴う重工業の発展で、日本にやってくる酸性雨が大きな問題になっている。

なお、梅雨の語源となった「梅」は、中国が原産だといわれているが、東アジアだけに生育している。日本にはおよそ 1500 年前に入ってきたといわれているが、平安時代には観賞用として植えられたようである。「東風吹かば 匂いおこせよ梅の花 主なしとて 春な忘れそ」という菅原道真(すがわのみちざね 845～903)の歌が有名だが、それより以前の 7 世紀後半に作られたという『万葉集』には、梅の花を詠んだ歌が百数十首もあり、桜の花を読んだ歌の倍以上もあるから、梅はそうとう古くから人々に親しまれていたに違いない。

菅原道真は、宇多天皇(第 59 代天皇、在位 887～897)によって右大臣に任命され重用された。当時、漢学の権威ともいわれた道真は、律令制度の再建を目指していたが、ライバル的な存在だった左大臣藤原時平(871～909)は、道真の政策には反対で、新しい政治改革の手段の一つとして仮名を奨励した。その結果編纂されたのが仮名書きによる古今和歌集であるといわれている。漢字に対して仮名を奨励したのは、やはり菅原道真に対する嫉妬と対抗心からだろうと思うが、醍醐天皇(第 60 代天皇、在位 897～930)に讒言して、道真を太宰府に左遷した。藤原時平は 39 歳の若さで亡くなるが、菅原道真の怨霊による祟りだと噂された。このころ都では地震、天候不順、火災など転変地変が頻繁に起こったため、これも菅原道真の怨霊による祟りだとされて、北野天満宮が建立され、菅原道真の霊を慰めた。また、菅原道真はその教養の高さから、学問の神様として祭られるようになったという。

なお、「3 月は雛祭り」で紹介したが、雛段の「左近の桜」はもともとは梅だった。紫宸殿の庭に植えられていた梅が何度も枯れたり焼けたりしたので、村上天皇(第 62 代天皇、在位 946～967)が桜に植え替えたという。ちなみに、この村上天皇は、梅干しで病気が治ったという話もあるが、中国では古くから梅干しは薬とされてきた。梅干しが日本の文献に登場するのは平安中期である。その後、梅干しは薬用から戦国時代には兵糧として戦闘食になった。当然滋養強壯の効力はあったと思われるが、なによりも戦闘直前の緊張による喉の渇きを、梅干しの酸っぱさによる唾液腺の刺激で、口の中の渇きが抑えられたことが、大きな理由ではなかったかと思われる。一般家庭には江戸時代中期になって普及した。

和歌山県の特産である紀州南高梅は、昭和 30 年(1955)頃それまでの梅を改良してつくられたもので、そもそもは、江戸時代初期に紀州藩の家老である安藤直次が、領内の米のできない土地に住む農民に奨励して植えさせたのが始まりだという。この安藤直次は「御三家の附家老」として有名である。徳川家康は十男の頼宣に紀伊 55 万 5 千石を与えたが、このとき幼い領主を補佐するため「附家老」と呼ばれる家老職に安藤直次と水野重央を任命した。ほかに、尾張家には成瀬正成、竹越正信、水戸家には中山信吉が任命された。なかにはすでに大名格の者もいたが、大名と同じ扱いをするという条件で、それぞれ 3 万石前後の所領を与えられて仕えた。しかし、家康の死後、この大名と同様に処遇するという約束は守られなかったため、明治維新になって復権運動がおこったのは有名な話である。

というわけで、梅雨どきは雨が降りやすいから仕方がないのだ、などと傘を差さないでいると洋服にシミができる。これは染料と雨中の酸が化学反応を起こしたものだから、もう洗濯してもダメである。もっと危険なことは、もしかすると酸によって頭が禿げてくるかもしれない。頭の毛が少ない人は、直接頭皮をやられるから大変である。毛も皮もなく頭蓋骨丸出しで出歩く羽目にもなりかない。それは嘘だが、梅雨時には気を付けよう。そこで一句、「五月雨を集めて頭にご用心」狂人・松尾罵声之作